



校長室だより 33号

中島 悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう 伝え築いた 振徳商業
 目指せ 三種目 日本一 !

【今・来週の行事】 12月3日(金)・6日(月) 振替休日
 5日(日) 県立3高等学校閉校記念行事(南郷ハートフルセンター)

1 「人間らしく」 3回卒 川衛 朝子 10周年記念誌より抜粋

2 出逢ったいい話『自然の摂理 命の法則』 『致知』2010年8月号より抜粋

「人間らしく」(一部修正) 3回卒 川衛 朝子

私は振徳商業高校を卒業して早5年になりますが、卒業と同時に東京のあるストロボ会社に勤務しました。社会に出て一人で生活して行かなければならない淋しさは、親元を離れ、住み慣れた土地を離れてみないとわからないものですね。社会に出て誰もがぶつかるのが、人間関係の難しさでしょうね。学生時代と違って、まったく環境の違う所からの人達と付き合い行かなければならないのですから大変です。在学中餅原先生がよく言われてたことは「人間らしく」生きて行きなさいということでした。今の世の中、絶対的幸福に生きている人はどのくらいいるのでしょうか。

表面的には、幸せそうに見えても病気、家庭不和、精神異常などなんと多いことか。残虐な殺人事件が増えているのは、何を物語っているのでしょうか。親を親とも思わない、子を子とも思わない無理心中ということばをよく耳にしますが、親の身勝手に子供を道連れに殺すということは犬、畜生にも劣る行為ですね。あまりにも「生命」というものを軽んじているのではないのでしょうか。

又、現代の子供は、親をあまりにも粗末にしすぎるのではないのでしょうか。

本当に悲しいことですね。「人間らしく」と考えた時、私は相手の立場になって考えてあげる、道徳的には、常識豊かに生活することですが、究極は「生命」を尊ぶことであるといいたいのです。

家庭に入り一児の母となった現在でも、高校時代の友人とお互いを尊重し大事につき合っています。

出逢ったいい話 『自然の摂理 命の法則』

百姓「徳重紅梅園」(代表) 徳重 文子さんの記事をご紹介します。

「生きてここを出られたら、いのちを守る食べ物を自分でつくる仕事をしたい」戦中戦後の動乱期に女学校を卒業、その後すぐに結婚したものの、生来病弱だった私は二人目の出産とともに結核に倒れ、生死をさまよう日々を送りました。

病棟では咯血で何人もばたばたといのちを落としていく中、私は“百姓”として梅づくりに生きる覚悟を定めたのです。子供の頃、漢方に明るかった祖父が、病弱な私が体調を崩すたびに青梅を煮詰めた梅肉エキスを飲ませてくれたことを思い出しました。「これはお前にとっていのちの綱だから しっかり作り方を覚えるんだよ」。祖父は幼い私の手を取って、ゆっくりゆっくりと土鍋をかき混ぜながら作り方を教えてくれたのでした。幸い、ストレプトマイシンの人体実験を引き受け、結核は治まりました。私はいのちを守るために生きることを決意したのです。

世間体のためだけに一緒にいた夫との生活に終止符を打ち、二人の子供を引きとって、宮崎の都城に借金をして土地を買い、1,500本の梅の苗木を植えました。何も分からず手探りで始めた梅づくりでしたが、戦時中、勤労働員に駆り出され、毎日いろいろな篤農家の下で農業の基礎を学んでいたことが大きな助けになりました。

同時に「お百姓さんがいなければ、どんなに偉い人でも生きていけないんだ」と感じたことが、この道で生きる誇りとなったのです。

人生を賭ける覚悟で始めたものの、やはり最初は失敗や苦労の連続でした。もちろんすぐに食べていけるようにはならず、クリーニング業や牧場などの副業もこなし、途方もなく忙しい日々が続きました。そんな時でした。昭和30年代後半、日本に農薬が登場し、「これを使うと楽になる」と周囲に勧められるまま除草剤を撒いてみたことがあります。すると一晩で土が白くなり、ざらざらになってしまったのです。

私は恐ろしくなって近くの国立試験場の先生を訪ねました。先生は農薬の恐ろしさをお話しくださり、「土はいのちです。まず土をつくりなさい。土が健康であれば作物は必ず元気に育つ」と教えてくださいました。この言葉が私の梅づくりの根幹となりました。そうして30年以上にも及ぶ私の土づくりが始まりました。図書館で勉強しては、自分の土で試してみる。そうして失敗してはまた図書館で調べる。遅々とした歩みではありましたが、自然は裏切りません。やったことの結果が必ず出てきます。

空気と土と水と太陽があって、いのちの循環がある。自然の摂理は、どんなに科学が進歩しても変わることはありません。試行錯誤して土づくりをしながら、私は自然界から哲学を学んでいったような気がします。梅づくりを始めて約50年、いまでは有機肥料を使った耕作によって、土壌にはミミズや何百億の微生物が棲むようになりました。梅園の土はホクホクとして柔らかく、地面から地中に軽い力で挿した棒がスーっと1メートル以上も入っていくほどです。

そうしてつくった梅を天然の塩で漬け込み、3年間樽の中でじっくりと寝かせ、天日干しして完成させた梅干しは標準的な梅干しより鉄分が9倍、ビタミンAやカロテンなどは23倍という結果が出ています。いま梅の木は1,800本に増え、梅干しや梅肉エキスはロコミなどによって全国に販売するようになりました。それでも1,800本の梅の木を有機肥料だけで栽培し、すべて手作業で加工することは、採算面で見れば決して楽な仕事ではありません。

「どういう信念で無農薬の梅づくりを貫いてきたのですか」皆さんからよく聞かれるのですが、80歳となったいま、ようやくその原点が分かるようになりました。

忘れもしない昭和20年4月16日、都城の航空基地から白んでいく明け方の空に多くの少年兵が飛んでいきました。当時私は15でしたが、自分より三つか四つ上の同世代の人たちが、沖縄に向けて飛び立っていった、その機影がいまも目に焼き付いています。戦争が終わり、多くの引き揚げ者が帰ってきましたが、彼らの姿はありませんでした。同時に、それまで受け継がれてきた日本の伝統のすべては否定され、欧米の文化が洪水のように押し寄せて、多くの日本人はそれを歓迎しました。

それは農業界も同じでした。百姓を農家と呼び、無農薬、有機栽培を捨て、効率や商売を優先して、化学肥料で大量に農作物をつくっては、消費し切れなかったものは簡単に捨ててしまう。あの日若い特攻隊の人たちは、こんな世の中にするために命を捨てて飛んでいったわけではないと思うのです。体も弱く、いつ死んでもおかしくなかった私が生かされてきたのだから、何か使命があるのだろう。それが梅づくりだったのだと、この年になってつくづく感じるようになりました。

私がやってきた50年に及ぶ無農薬の梅づくりは大変な道のりではありましたが、自らつくりあげたわけではなく、本来日本人が何千年と続けてきた、自然の摂理に適った農法です。それで本当においしく、体にいい農作物をつくってきたのです。この日本人の英知を何も足さず、何も引かずに後継者である孫の俊一郎に伝えていくことが、私の残された人生の使命だと思っています。